
青い薔薇のルクレティア

梅雨子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い薔薇のルクレティア

【Nコード】

N7689W

【作者名】

梅雨子

【あらすじ】

とある小国の城下町に、ハンナという花屋の売り子がいた。黒い髪に青い瞳を持つ彼女は、前世の記憶を持つ。そんな彼女は、前世から今のいままで愛する青年がいる。彼も、この国に生まれ変わっていた。

（まさか、こんなに傍にいたなんて）
驚くハンナの今と前世の恋愛物語。全7話。途中、エグくなりません。

1. プロローグ

今生きる国とは違う、大国。

前世、彼女はそこにいた。

彼女の記憶にある世界は狭く、暮らした邸から夜会が催される会場、そしてその往復が主であった。

実際、彼女のいた世界が小さな世界だった、ということではない。しかし、行動が限られていた彼女の世界は狭かった。そういうことだ。

覚えている光景は、あまりに眩しく。燭台に灯された小さな炎が照らし出す世界は、いつだって華々しかった。

忘れはしない。

決して忘れることのない記憶。

細かな模様の刻まれた象牙色の壁、大理石の床には紅の絨毯が敷かれ、集まる男女は洗練された魅力を放つ。誰もが背景になることはなく、自分が主役だと主張するようだった。

その中で、彼女は疎外感を味わう。

外の世界をあまり知らない彼女は、自分は脇役で野暮ったく、この場に不相应だと思つたのだ。

生温い空気に息が詰まるのを感じ、ついに彼女はテラスへと逃げるようにして足早に向かう。

涼やかな微風そよかぜが会場の熱気でのぼせそうだった彼女の体温を下げる。共に、心も幾分落ち着き、小さく笑む。

そうして、夜の暗闇に包まれた庭園で。

彼女は、出逢うのだ。

「 今宵、君と出逢えた奇跡に」

そう言って、青い薔薇を差し出した青年に。

彼女は、知るのだ。

身を焦がすような、命をも懸けるほどの、最愛を。

彼女は、恋に落ちるのだ。

己を滅ぼすことになる、その、きっかけと……。

2・花売りの娘

小さな国の城下町。街の象徴である尖塔と薔薇窓が特徴的な城の裾に広がるそこは、いつだって活気付いていた。

人気の多い通りには店が立ち並び、歩む人の気を逸らせることもしばしばである。

そんな石畳の道脇で、ハンナは花を売っていた。

花を売る、といっても、身体は売らない。ハンナの家は家族経営で花屋を生業なりわいとしており、両親は店番をしているため、彼女は売り上げが少しでも伸びるよう人通りの多い道で売り子をしているのだ。「花はいかがですか」。瑞々しい薔薇はいかがが。赤、白、黄、青まで色とりどり揃えております」

声を張り上げながら、ハンナは視線を城へと移した。

城のバルコニーでは、王族の一人が手を振っている。

ハンナは記憶を弄り、手を振る主が誰だったか考えた。

（ええと、昨日は第一王女様だったから……今日は第二王子様だったか）

その国では、王族が定時にバルコニーから手を振り、挨拶をする風習があった。複数の民族が集まり、はじめは揉め事もあったようだがそれも今では久しく、現在はまるで最初から一つの民族だったかのように一丸となっている、平和で小さな国ゆえに可能な習わしだろう。

城からすぐの城下町といえど、バルコニーからの距離は遠い。とはいっても、城の高さはそこまでなく、全体で五階建てほど。王族が手を振るバルコニーはその中腹であるから、はつきりとは無理で

もおおよその顔立ちくらいは判別できる。

くせのある鳶色の髪を風に靡かせながら、どこか憮然と手を振る青年。噂によれば、彼は心根は優しいらしいが、不器用で素直になれないらしい。そこがまた母性本能をくすぐるのだというのは、花屋の常連客女性の言葉である。

ハンナは肩を竦める。拍子に、片側に寄せて束ねていた黒髪がすりと背に流れた。

王族の挨拶は一日一人、日替わりだ。

定時、バルコニーから手を振る王族を一目見ようと、街の者は集まる。その時機がハンナにとっての稼ぎ時。とくに、近頃では若い未婚の王子が挨拶の日は、乙女たちが花を購入してくれる。

「青い薔薇、一輪くださいな」

声をかけられる。ハンナは反射的に声の方へと顔を向けた。

小洒落た装いの、年若い女性が紅色の唇に弧を描く。

「青い薔薇ですね、銅貨一枚になります」

確認するように復唱し、手に提^さげていた籠から青い薔薇を一輪差し出した。

女性は布財布から銅貨を取り出すと、薔薇を受け取り艶やかな黒髪を揺らす。

「あなたも黒髪ね」

ハンナは銅貨をポケットにしまい、笑みを返した。

「流行ってるみたいですね。やっぱり、例の物語の影響でしょうか？ 偶然か必然か、青い薔薇も最近よく売れるんです」

女性はふふ、と笑った。

「やっぱり、みんな考えることが同じなのね。わたしの髪、染めたのよ。染め粉で」

「そうなんですか？ もったいない」

「あら。じゃああなたの黒髪は天然なのね。……あの物語の姫を真似したくなるくらい、素敵なお話だもの。髪を黒くしたら、それを書いた方の目にとまるかもって、期待したくなるじゃない」

「ああ、明日のご挨拶はフィロン殿下でしたね」
「だから、明日に備えて気合いれようかと思って」
そう言い、「素敵な薔薇をありがとう」と言葉を残して女性は衣を翻した。

ハンナは籠に視線を落とす。

気がつけば、青い薔薇は完売していた。残るは赤、白、黄。もともと黄色はあまり売れないため期待していなかったが、青が売れるかわりに赤がめつきり売れない。

(こんなことなら、青い薔薇だけ持つてくるんだった)

肩を落とし、それでも青い薔薇が完売してくれただけよかった、
と思いなおす。

(まさに、フィロン様様ね)

ハンナは再度バルコニーを見上げた。

明日、あのバルコニーから挨拶する、第三王子フィロン。

近頃、乙女たちが青い薔薇を買い求めるのは、彼が書いた物語に起因している。

半年ほど前だろうか。

フィロンは自筆の物語を突如発表した。まさか王族の、しかも王子が恋愛物語を出版すると、誰が思っただろうか。驚いたのは、少数ではないはずだ。

王子が手がけた、ということもあり、話題にのってその本は城下でも売り出された。そしてそれは瞬く間に売れ、今や空前の大当たり^{ヒッ}。

その本を、もちろんハンナも読んだ。自身と同じ黒髪がどんどん増え、売る青い薔薇が売れば気にならないはずがないのだ。

物語は、悲恋だった。

ここではない、ある国。

魔女と呼ばれる、黒髪と青い瞳を持つ美しい姫がいた。

下位貴族の青年は、彼女に恋をした。姫も、彼に恋をした。けれど、青年は別の、高位貴族の女性と婚約しようとしていた。権力のために。

姫は嘆き悲しんだ。

やがて、青年は姫への愛を断ち切れず、婚約の話を白紙に戻す。そうして姫に会いに行った。

しかし、時既に遅し。

青年が会いに行った時、姫の命は尽きていた。

青年は姫の亡骸を抱き、絶望する。

思い至ったのは、来世での逢瀬。

青年は呪いまじなを施す。

姫の手首と己の手首を手錠のように紐でくくり、一輪の青い薔薇をそこに添え。

それは、古くから伝わる青い薔薇の呪い。

来世で、また出逢い、今度こそ結ばれるための。

青年は、その呪いにすべてを託し、短剣で自害した。

この物語を読んだ時。ハンナは驚愕し、言葉を失った。すぐに本の題名を確認し、確信する。

『青い薔薇のルクレティア』

美しい王子が書いた、悲恋。

人気商売を営むがゆえに、なにか参考になればと読んだのだ。

なのに。

それからすぐに、城下で耳にした噂。

第三王子が、物語の姫を捜しているのだと。

黒髪と青い瞳を持つお姫様。ルクレティアという名の、お姫様。

多くの者は、夢見る王子に呆れ、嗤うだろう。

だが、ハンナの心は震えた。

ずっと、ずっと愛しているひとがいる。彼は記憶の中でしか逢えないけれど、それでも構わなかった。薄れることなく、愛おし

いと思う。

ハンナはバルコニーを見つめたまま、目を細める。

「……あなたはすぐ傍にいたのですね、アリストフォン様」

アリストフォン それは、ハンナが持つ、前世の記憶の中で愛した男の名。

ぽつりと呟かれた言葉は風にさらわれる。

(まさか、またお会いするとは思わなかった)

第三王子フィロンの書いた物語。

それは、まさにハンナの前世の記憶とほぼ同じであった。

前世の彼女はルクレティアという名があるにも拘らず、魔女と呼ばれた。そして、若くして命が尽きた。

初めてフィロンの挨拶を目にしたのは、どれくらい前だろうか。確か、まだ互いにもう少し幼かった頃。城下での花売りをはじめた年。

ハンナは幼いフィロンを一目見た瞬間、目を瞠り固まった。確かに彼がアリストフォンだと思いながら、心の片隅では、もしかしたら他人の空似かもしれないと自信に欠けていたのだ。しかし、フィロンの書いた物語が、ハンナに確信させた。

現代の人びとが知るはずのない、前世のフィロンとハンナの物語。ただの偶然と言えるだろうか。

前世のフィロンとハンナは、こことは違う国で生きていた。今世で花屋の娘として生まれ育ってきたハンナには、一体それがどこの国のことなのかもわからない。街の古書店でちらりとそれらしい本を探してみたが、記憶と一致するものはなかった。

それでも、自分の知る国ではないといえるのは、言語や建築物の造りが違うからだ。顔立ちは似たり寄ったりで、フィロンもハンナも前世の生き写しのような容姿をしているが、文化は確かに異なる。

そんなどこかもわからない国が舞台で、来世に委ねる呪いや登場人物の名前をはじめ、なにからなにまでそのままなのに、偶然だと

はハンナには思えなかった。偶然だとしたならば、むしろこれが運命なのだといえよう。

本の末尾に添えられた、『今の時代を生きているだろう最愛のひと、ルクレティアに捧げる』という一文を見るに、やはりただの偶然だとは思えないけれども。

（ 彼が今世では王子に生まれかわっているなんて、ね ）

ハンナは小さく口角を上げる。その時。

「あー、お嬢さん、ちよつといいかな」

背後から、野太い男の声がかげられた。

「はい？」とハンナは振り返る。

そこにいたのは、屈強な男。腰に下げた長剣と装いは、騎士のものであった。

どう見ても、職務中に花を買うとは思えない。ハンナが訝ると、騎士は苦笑しながら親指でこれから向かう方角を指す。

「騎士団詰め所まで、ご同行願います」

ハンナは両眉を上げた。

3・騎士団の詰め所にて

ハンナは今、筋骨隆々な二人の男に囲まれている。

大きくもなければ小さくもない部屋。広さは寝台を縦に二つほど並べたくらいか。その部屋も、二人の体格のよい男が詰め込まれれば、小さく感じるというもの。

(暑い……なんともいえないくらい暑い……ていうか熱い……)

その部屋の中央に置かれた、これまた勉強机くらいの大きさの机に、ハンナは男一人と向かい合う形で座っていた。

決して色恋といった逢瀬ではない。絶対ない。

そも、ハンナの好みは爽やかな青年なのだ。淡い色の髪と、宝石のような瞳を持つ、どこか繊細な雰囲気、魅力的なひと。それはまさにフィロンのことである。

けれど今彼女の目の前にそびえる男たちは、繊細のせの字も見当たらない。探せといわれたなら、筋肉男その二あたりの頭か。彼の髪は実に繊細そうで……近い将来はきつと抜け落ちていることだろう。

ハンナが筋肉男その二の頭、もとい髪を凝視することで意識をとばしている、それに気づいた筋肉男その一、ことハンナの目の前に座る男が声を荒げた。

「おい、聞いているのか！ お前の名前と職業はなんだと訊いているんだ」

ハンナはハツと意識を男に向ける。

(ああ、忘れてた。あまりの緊張に現実逃避しちゃった。……尋問だか詰問だかの最中だっけ)

取り繕うように適当な愛想笑いを振りまいて「もちろん聞いてお

りますとも、騎士様方」と言えば、（本当かよ）と言いたげな胡乱な眼を向けられた。

ハンナは筋肉男、こと騎士に、手に提げていた籠を見せた。中には瑞々しい花がたくさん入っている。

「私の名前はハンナでございます。花屋のハンナ」

「……っ、なんつーか安直な名前だな」

騎士の率直な物言いに、ハンナは少し傷つく。自分でも、思っただけはいたのだ。両親の命名に対し、同じことを。それでも、嫌いな名前というわけではない。大好きな両親がつけてくれたのだ。

だから、開き直すことに決め、素朴な疑問を投げかける。

「覚えやすさに勝るものはありません。で、騎士様方、私はなぜここに連れられてきたのでしょうか？」

かれこれ、彼女がそこ　街にある、騎士団の詰め所　に連行されてから、真上にあつた太陽がわずかに傾く時間が経過していた。

ハンナは善良な、といえば聞こえがいいが、正しくは騎士に捕まるほどの悪事を働いたことのない、どこにでもいる街娘である。

性別女、年齢二十、職業花屋。とくにこれといって際立ったなにかもない。唯一の非凡といえば、前世の記憶を持つこと。だが、それを誰かに話したことはなかった。ゆえに、騎士たちに突然声をかけられ、詰め所まで連行された理由を彼女は知らない。

首を捻っていると、それまで苦虫を噛み潰した顔で沈黙していた騎士が、嘆息しながら言った。

「お前は、フィロン殿下のお噂を耳にしているか？」

ハンナはきよとん、とした後、目を瞬く。

「え、ええ、はい、あれでしょうか？　殿下が、お書きになった物語のお姫様を捜していらつしやるという、あの噂ですよね？」

騎士は腕を組み、神妙に頷いた。

「そうだ、それだ。殿下は黒髪と青い薔薇と同じ瞳を持つ娘を手当たり次第に捜し出し、物語の娘を見つけ出そうとしている。……今

はこの街だけだが、いずれは国内……いや、国外も搜索範囲になるかもしれない。我々も殿下の酔狂につき合わされ、振り回されているんだ。運命だのなんだの……」

一息つくようにして長い溜息を吐いた騎士に、ハンナは困惑した笑いを漏らす。

「お疲れ様です」と一言かければ、騎士は眉を上げ、ついでくしゃりと顔をゆがめて豪快に笑った。

「いや、むしろ王子のお遊びにつき合せて悪いな。あれでも、眉目秀麗で切れる方なんだが……今回の思いつきには俺らもびっくりしたもんさ。まあ、明日はフィロン殿下の挨拶の日だし、その時に……つそり青い薔薇を売りまくってくれや」

「それは大もうけの予感です。でも、明日は私、非番なんですよ。気が向いたら、そうします」

そうして、ふと、ハンナは顔を上げた。その顔には、先ほどの笑みとは違う、どこか無邪気さが浮かべられている。

「でも、どうやって物語のお姫様かどうか判断しようとしているんですか？」

好奇心むき出しの問いに、目の前に座っている騎士ではない、それまで”休め”の体勢で様子を見守っていた置物　こと騎士その二が、手に持つことで背後に隠れていた籠を机に置いた。

籠の中に陳列されるのは、色とりどりの薔薇。

赤、白、黄、青、紫、淡紅と、おそらく全種ではないだろうか。

ハンナは眉間に皺を寄せた。

「……営業妨害ですか？」

「違う」

騎士は即断し、顎で籠の中の薔薇を指す。

「この中から、お前の気に入った薔薇を選べ。それが、殿下に命じられた審査の方法だ」

ハンナは目を見開いた。

たったそれだけでわかるのか、と疑念を抱くが、すぐに思いだし

たのは王子の書いた物語。

二人の愛を象徴する、青い薔薇。

そこに意味があるのだと、ハンナは察する。物語が広まった今、ここに連れられた何人の乙女がこの薔薇を選んだだろうか。もしかしたら、その後、今度は殿下直々なる審査があるのかもしれない。ハンナは口尻を持ち上げ、「私はこれが気に入りました」と囁く。そうして、一輪の薔薇を手にとった。

騎士から解放され、花屋へと帰ったハンナは、店じまいをする母に声をかける。

「ただいま、母さん。今日はご飯いらないや」

「おや、そうかい。珍しいこともあるもんだね。明日は雨か……」
頂垂れた母の言葉に拗ねながら、店の奥にある居住空間へと踏み入れた。

ハンナの部屋へ続く扉を開く。

机と寝台と本棚があるだけの、こじんまりとした小さな部屋。けれどそこが、今の彼女の心休める場所なのだ。

金持ちではないから、どの家具も自然そのままの木の色。

疲れを投げ出すように寝台へと飛び込めば、それはギシリと軋む。決して柔らかくはないが、そこがハンナの天国。

布団に顔を埋め、ぽつりと呟く。

「覚えていたんですね、すべてを」

物語では書かれなかった、前世の記憶がある。

それは、前世で生きた国の文化で、この国にはないそれ
花言
葉。

花を贈るには意味がある。かつて生きた国では、告白の際に言葉を告げずして想いを伝える道具に、花をよく用いた。

赤い薔薇は愛情を、白い薔薇は尊敬を、黄色い薔薇は嫉妬を
青い薔薇は奇跡を、意味する。

青い薔薇の花言葉を、彼は覚えていたようだ。

この国で、忌避の対象ではない黒髪と青い瞳。しかし前の生では、魔女の証と言われた。ハンナの前世 ルクレティアも、そうして魔女と呼ばれた。

けれど。

（青い薔薇は奇跡だと、あなたは言った）

それにどんなに救われただろう。

彼を思い出せば、胸は高鳴り、鼓動は速くなる。切なさと甘さを帯びた締め付けは、今もハンナが恋をしている証拠。

「愛していません、アリストフォン様」

ハンナは今宵もその名を呼ぶ。前世からずっと今まで愛する、その青年の名を。

4・前世の夢 (1)

前世の記憶は、ハンナが成長すると共に色濃くなった。

ルクレティアの成長を夢として見はじめ、それが不思議でもあり、彼女にとっては当たり前のことでもあった。成長過程を夢見ること、かつて生きた異国の言葉を自然と覚え、夢の続きを支障なくみることが出来る。

それが楽しかったのは、いつまでだっただろうか。

魔女呼ばわりされる少女の容姿が、いつだって等身大の自分と同じ姿をしていると気づいたのは、いつだっただろうか。

夢を、前世と結びつけたのは。

(……ああ、そっか。幼いフィロン様を一目見た時だ)

彼がアリストフォンだと、信じていた。最初は似ているだけかもしれないと思いましたが、彼を今も愛していると自覚すればなおさらに、それは確信に変わる。さらに、フィロンはたくさんの手がかりをくれたのだ。

もはや信じない理由などなかった。

ハンナは今夜もかつての記憶を彷徨う。

夢の中、結末を知る物語を読むように。

+
+
+
+
+
+
+
+

そこは、大国だった。

貴族たちは周辺国をも影響及ぼす権力を有し、したがって誰もが更なる力と地位を求める。

夜会は、己の地位を磐石にすべく繋がりを求めるには最適な場所であった。

しかし、ハンナの前世　ルクレティアが夜会に参加することは滅多にない。ハンナの母が、彼女を人前に出すことを嫌ったのだ。貴族の令嬢といえ、女といえど家の道具。そんなことは常識で、ルクレティア自身覚悟していた。だが彼女は、幸か不幸かその役目すら奪われていた。

参加が許されたのは、年に数度の大規模な夜会のみ。いくら人目を気にする母といえど、高位貴族主催のそれに家族が欠けることは体裁がよくないと判じていた。

だからルクレティアは、数回の夜会の際には鬘かみを身につけることを義務付けられる。染め粉では、もとが黒髪と色味が濃いため、染めるのに限界があった。

母がルクレティアに、子守唄がわりに聞かせた言葉がある。

『黒い髪は魔女のもの。青い瞳は魔女の薔薇』

その言葉は、まさにルクレティアの容姿をそのままに表す。

その国の御伽噺。

昔、王がいた。

彼は、知らず魔女を娶った。

魔女は、青い薔薇の種を携えていた。

王は魔女に操られ、愚王となった。

国の荒廃とは逆に、魔女の植えた青い薔薇は成長した。

国の益を魔女が魔法で養分に変え、青い薔薇に与えていたのだ。やがて魔女は国を想う者に討たれる。

魔女の死に絶望した王は、魔女の青い薔薇の蔦を彼女の手首と己の手首に巻きつけ、命を絶った。

魔女の青い薔薇に、来世での逢瀬を願って。

この御伽噺に登場する魔女の瞳が、青かったという記述はどこにもない。ところがルクレティアの母は、娘を魔女だと信じて疑わなかった。

母を省みず、愛人のもとへと足繁く通う父のせいだと。母は、自分ではない誰かのせいになくは、心を保てないのだと。年老いた使用人は嘆いた。もともと母は世間知らずのお嬢様で、父はそんな母の実家が名家であるために口説き、支援を求めて結婚した。それを、母は結婚してから知ったのだという。

同情すべき点はある。

けれど、ルクレティアがその感情を抱いたことなかった。

母の事情で邸から滅多に出られず、魔女と罵られる日々。

生んでくれと誰が頼んだ？

こんな容姿で生まれることを、ルクレティアがいつ望んだ？

恨みにも似た想いが心の底に沈殿していくのだ。

それでも、母の言葉は多くの者の言葉なのではないかと、どこか不安を抱く。ただの母の妄言だと心の中で強く反駁しているのに、否定しきれない。それは、母以上に外の世界を知らないから。

ルクレティアの世界はあまりに狭かった。世間知らずは彼女も同じ。だからこそ、劣等感を抱き卑屈になる。

久しぶりに参加した夜会は、光を遮るために手をかざし、目を細めたくなるほどに眩い。

絵画の描かれた、円蓋から吊るされるシャンデリア。点在する燭台は、会場の細かな気遣いを程よく照らす。

その会場の、象牙色の壁に背を預け、ルクレティアは場内を見渡した。

大きな宝石を身につけた淑女。髪を上げ、胸元の開いたドレスを

纏う彼女らは、妖艶さで男たちの視線を集める。

髪を後ろに撫でつけ、完璧な動作で品のよい貴族と想わせる紳士。女性を慮る立ち居振る舞いで、彼らは女たちを魅了する。まるで、各々が主役だと言い張るように。

煌びやかな会場にもまったく遜色のない、彼らの洗練された姿。

そして、会場のどこにも黒髪がないという事実。それらにルクレティアは、劣等感と疎外感を抱く。

母に魔女と呼ばれる容姿への侮辱は彼女の妄言だと思っていたが、真実なのかもしれない。

それでも、自分くらいは自分を愛そうと思っていた。だから、今は髪で隠している黒髪も愛したい。

(もし、そのままの私を愛してくれるひとがいたなら
きつと自分を愛せると、ルクレティアは信じていた。)

もやもやとした暗い感情が心に渦巻くのを感じ、夜会の場で負の感情を駄々漏れしないよう慌てて深呼吸する。しかし、空気は変に温かく、心が健やかになることはなかった。

結局、逃げるようにしてテラスへと向かう。

外の空気は、会場とは違い少しばかり肌寒い。

ルクレティアにとっては、身体にこもった熱を逃がすのにちょうどよかった。落ち着く心に笑みを零す。

会場から漏れ聞こえてくる喧騒の中に、艶麗な音楽がまじる。どうやら、踊りの時間が始まったようだ。

だからだろうか。今、テラスにはルクレティアしかいなかった。

夜会でもまだ序盤。そんなこともあり、薔薇の咲く庭園にも人はほとんど見受けられない。

人気のないことに安堵し、手すりに両肘をついてのんびり庭園を眺める。

宵闇の庭園は、様々な品種の薔薇が植えられていた。赤、白、黄色。ルクレティアの瞳の色と同じ、青い薔薇もある。

無意識のうちに、片手を目元へとやっていた。

「……魔女の、青」

そう呟き、目を伏せた時。

摘み取られた一輪の青い薔薇が、目の前に迫っていることに気づく。

驚き目を見開けば、青い薔薇が横へとずらされ、青年の顔が間近に現れた。

突然現れた青年。続く驚愕に口をあんどりと開け視線をおろすと、テラスと庭園との段差で、青年の顔がルクレティアの視線より少しばかり下にあることに気づく。呆けていたルクレティアは視線を遠くへ向けていたために、視線より下にいた彼の存在に気づかなかつたようだ。

青年は、夜闇の中にも光を放つように浮かんで見えた。会場からこぼれるわずかな明かりが、青年の容姿を定かにさせる。

くせない白金の髪、宝石のような紫の瞳の、甘い顔立ち。品格を備えた一挙一動には、目を奪われる。神の芸術とも言える容姿なのにどこか好奇心を秘めた瞳は、大人である彼をどこか幼く見せた。彼は感興をそそられたのか、首を傾げて白金の髪を揺らす。

「青い薔薇は嫌いかな？」

ルクレティアは虚を衝かれ、口ごもる。それでも質問を取り消さない彼に、嘆息して返答を決めた。

「それは、私の瞳の色を知っていておっしゃっているのですか？」
言外に”嫌味ですか？”と意味を含ませ言えば、彼は無邪気に笑った。

「僕は青が好きだからね。君の瞳、きれいだな、と行って」
にこにここと、子どものように。

つい毒気が抜かれそうになるが、ルクレティアの脳裏に過ぎったのは、母の言葉。

『黒い髪は魔女のもの。青い瞳は魔女の薔薇』

もし、瞳の色が青いだけならば、ルクレティアも青年の言うよう

に思ったかもしれない。しかし、彼女は髪も魔女の色をしていた。白金の髪と紫の瞳を持つ、美しい青年。彼は、ルクレティアの劣等感を知らない。おそらく、この先の人生でも知ることはないだろう。

八つ当たりのような感情が昂り、手すりに置く手に力がこもった。「……魔女の、青でも？」

自虐のように言葉を紡ぐ。

青年は、頷いた。

それに 苛立つ。

今まで、ルクレティアは同情されることが多かった。邸の使用人から、知人から、多くの人から。その同情に煩わしさを感じることも多しよっちゆうだ。だが、魔女の特徴のどれも備えない人間が、このうと『魔女の青が好きだ』と言うのはもつと腹が立つ。

(なにも、知らないくせに)

興味本位で他人の心を暴かないで！

その心を代弁するように、ルクレティアは己の鬘を鷲掴む。「え」と青年が目を丸くすると同時に。

ルクレティアは勢いのままに鬘を外した。

現れたのは、今までそれに纏められていた黒髪。さらさらと、ルクレティアの背に流れる。

呆気にとられたままの青年に、ルクレティアは皮肉げに口角を上げる。これで失言に気づくのだろうと、どこか驕った思考をもって。しかし、青年の反応は違った。

彼は、楽しそうに目を細めたのだ。

「……なんで、笑っているの？」

自分が惨めに感じるのはなぜだろう。ルクレティアの目頭は熱を持ちはじめ。悔しさか、羞恥か、それともその他の感情ゆえか。ルクレティアにはどの感情によるものなのかわからない。

ただ、これだけはわかる。

今、自分がしている行為は、どういう意味を持つのか。母が知れ

ば怒るだろう。父は無関心だから、きつとなにも言わない。自分は
どうしてこんな行動をとったのか。

心が揺れる。それを反映するように小刻みに震えれば、青年は優しい
声音で囁いた。

「好きだよ。魔法の青い薔薇も、その瞳も、黒い髪も」

視線を逸らすことなく、真摯な双眸が睜目するルクレティアを射
貫く。彼は、そのまま言葉を紡いだ。

「僕は、あの魔法と王の御伽噺が好きなんだ。……君は魔法を悪し
き者だと思っているかもしれないけれど、もし、王が賢王だったな
ら、きつと彼女は聖女と言われていただろうね」

「でも、魔法が王様を操ったって、物語では……」

「僕は魔法も魔法も信じていない。この目で見たことがないから。
君は、ある？」

突然の問いかけに、ルクレティアは咄嗟に首を横にふる。何度も
魔法と言われたが、呼ばれたルクレティア自身、魔法など使えない
し、見たこともなかった。証拠のないそれを、どうして信じて
しまったのだろう、と今更ながら思う。

「ね？」と髪を揺らした彼は、「でも」と言葉をついだ。

「魔法と王の恋は悲恋だったけれど、彼女たちの最期が嫌いじゃな
いんだ」

ルクレティアは青年の言葉を吟味するように、二人の最期を思い
描く。

魔法は、殺された。……王は、魔法と来世で逢うことを願い、
青い薔薇の呪いを施して後を追った。

どこか惨くて、悲しい結末だと思った。しかし、彼は違う感想を
持ったようだ。

「どうして？」と首を捻ると、青年は切なく目を細めた。

「魔法に恋した王は、きつと神の意思に背いただろう。でも、神の
定めた運命に逆らって、たとえ魔法の育てた魔法の青い薔薇を利用
したとしても 愛を貫いて来世での逢瀬を願ったなら、悪いこと

だと思わない。神の運命を捻じ曲げたのだとしても、彼らは相応かそれ以上の強い気持ちを持っていたのだから」

ルクレティアは動けなかった。

目から鱗。まるで違う価値観。そう考えることができたとしたなら、ルクレティアはどんなに母から魔女と罵られても、傷つくことはなかっただろう。

(……こんなひとに、もっと早く出逢いたかった) そうしたら。

さつき、ルクレティアが感情のままに髪を外したのは、罪悪感を持たせ、黙らせようと思ったからだ。黒い髪と青い瞳を見たら、誰もが憐れみ、蔑み、近寄らないと思ったから。

しかしその行為の真相は、ルクレティアの本音を表すものだった。一番ルクレティアを侮蔑し、貶めようとしていたのは、誰だったのか。

それがルクレティア自身だと気づいた瞬間。ルクレティアの頬に幾筋もの涙が流れる。

自分を愛そうとしていた自分自身が、真っ先に刃を向け、嫌悪していたのだ。

嗚咽を漏らしそうになるけれど、青年がいるから声を押し殺す。それに気づいたのか、手すり越しに抱き寄せられた。

今まで知ることのなかったためくもり。彼のつける香水なのか、心風ぐ香りがした。

異性の力で青年の首もとに顔を押しつけられる。頭を撫でられれば、涙も声も抑えられなくなった。

逢ったばかりの青年。けれど。

彼にどんなに救われただろう。

やがて涙が枯れる頃、青年はルクレティアの耳元で甘く囁く。

「青い薔薇、受け取ってくれるかな？」

ルクレティアが顔を上げれば、先ほどの青い薔薇が差し向けられる。

「 今宵、君と出逢えた奇跡に」

ルクレティアに拒む理由はなかった。

人生で初めての歓喜に破顔させ、薔薇を受け取る。

刹那に、空いていたもう片手が青年のそれに絡めとられたが、それを拒む理由も、またなかった。

+ + + + + + + +

青い薔薇の青年は、自らをアリストフォンと名乗った。フィライオス男爵家の次男だと言う。

ルクレティアの生家は伯爵家であるが、跡を継ぐのは男兄弟であるために、彼を養子に迎えることはないだろう。

出逢った夜から、ルクレティアとアリストフォンは逢瀬を重ね、閨を共にした。

伯爵家の住人が寝静まる深夜、アリストフォンは忍んでルクレティアの部屋に訪れる。邸の警備をしている使用人には彼の来訪を予め知らせているため、これまで夜這いが失敗したことはなかった。

無事入室を果たした青年は、すぐにルクレティアを寝台に押し倒すことはない。しばらく言葉を交わし、互いの情報を引き出す。そう聞けばまるで駆け引きのようだが、真実はそうではなく、ただ他愛もない話をするだけで、夜会では知ることのできない恋人そのひとを知る機会になるのだ。

そうして、どちらともなく寝台へと向かう。

寝物語で、アリストフォンは何度も「愛している」と甘い睦言を囁く。その言葉に、どんなにルクレティアの心が震えたか、彼は気づいているだろうか。

照れて赤く染まった頬を隠そうと青年の背に腕をまわし、むき出しの胸板に顔を寄せ、ルクレティアはいつだって「私もです」と小さく呟く。常に精一杯で、人肌のぬくもりを知らない彼女にはそれしかできなかった。

魔女と呼ばれ、邸からあまり出ないルクレティア。彼女にとって、アリストフォンは初恋のひとだった。

何よりも大切に、会えない夜など考えられないくらい愛おしい。胸の内を満たすのは、すべてを投げ出しても構わないと思うほどの恋心。彼が幸せになるのなら、自分の何をも捧げられると思うのに、彼を誰かに奪われるのなら、自分がすべてを奪いたいと思うほどに、恋に狂っていた。

他のなにも見えなくなるほど盲目に、彼女はアリストフォンを愛した。

けれど。

朝、目が覚めれば、アリストフォンは寝台から消えている。毎回だ。……まるで愛し合ったことが夢か幻だったかのように。それでも現実だったとわかるのは、彼は青い薔薇を一輪残していくからだ。その薔薇を、ルクレティアは花瓶に活ける。ともすれば、一日ずつ増える青い薔薇は花瓶をいっぱいにした。

アリストフォンとの出逢いは、ルクレティアの世界を彩った。彼女は”幸せ”だと、心の底から思った。しかし、その幸せは長く続かない。

5・前世の夢 (2) (前書き)

軽い流血描写があります。苦手な方はご注意ください。

5・前世の夢 (2)

それは、本当になんの前触れもなく。

アリストフォンは突如として、ルクレティアのもとを訪れなくなった。

ルクレティアは待った。待つて待つて待ち続けた。

月が昇る回数を指折り数え、萎れていく花瓶の薔薇を見つめて涙を流す。

そうしてただ待つしかできない自分にもどかしさを覚えた彼女は、ついに手紙を出そうと文をしたためる。

文を書くなど、いつ以来か。魔女だと言われて育ったルクレティアは社交の場にあまり参加していないため、顔見知りも少ない。したがって、手紙を送る相手などほとんどいないと言っている。

手紙を綴る基本が記された本を何冊も読み、便箋に文字を連ねる。どうか、重くならないように。それでも、淡泊すぎないように。

細心の注意を払って書いた手紙は、侍女に託した。

だが その文の存在を知った母は、ルクレティアを嘲笑し、言い放つ。

「あなたに会いに来ていたファイライオス男爵家の……ああ、アリストフォンといったかしら？ 彼、侯爵家のご令嬢と婚約間近らしいわよ。近頃、夜会では有名な話」

嗤う真つ赤な唇。父の心が遠のいたのは、魔女によく似たルクレティアのせいだと思っているがゆえに、母はいつだって責め、蔑む。いつものルクレティアならば、無言を貫いたことだろう。が、今回ばかりは違った。

珍しくも彼女は動揺を見せたのだ。瞳を揺らし、口元を小刻みに震える両手で押さえ、床にへたりこむ。

母は驚くように眉を上げると、すぐに満足そうに目を細めた。

「魔女が愛してもらおうだなんて図々しい。お前は知らなかっただろうけれど、彼は多くの女性と関係を持っていたのよ。お前なんてよくて色物、普通に考えて珍獣くらいにしか見られていなかったということ。身の程を知りなさい」

ルクレティアを傲慢に見下す、視線と言葉。

ところがルクレティアは、スマートフォンが婚約間近だという言葉で頭がいっぱいになっていた。

母の言葉は、もはや雑音でしかない。

足場が崩れるような感覚に、ただただ茫然とした。

母の言葉の真偽も、どうしてこんなことになったのかも　なに　もかも、わからない。考えるほど心に余裕などないのだ。

「信じられないなら、今夜の夜会へ行くことを許しましょう。そこで、真実を知るといいわ」

それまでルクレティアが夜会へ参加することを嫌がっていた母は、自らそう口にした。娘の傷つく姿が見たいのだと、その表情が物語る。

ルクレティアは、緩々と顔を上げた。

+ + + + + + + +

夜会の会場は、鮮やかな衣に身を包む参加者たちでごった返す。

その中に、ルクレティアはいた。今日の彼女は髪をつけておらず、長く艶やかな黒髪を青い薔薇の簪で結い上げている。色味の濃いド

レスと塗れ羽色の髪は、明るい会場では人目をひいた。

注目を集めようと着飾る参加者たちが多いものの、ルクレティアにとつてそれは本意でない。淡い色のドレスを纏えば黒髪が際立つと考え、原色よりもさらに暗い色を選んだのだ。

しかしながら、髪をつけないことで数多の好奇心な視線を浴びるのは必至。粘つくような視線がいつそ煩わしい。

それでも、いつもに比べれば今日はそんなことも微々たることに思えるくらい、別の緊張感をより抱いていた。

常に抱く緊張は絢爛豪華な会場と、人目を気にしてという種のもの。だが、今日は。

(……アリストフォン様)

彼のことしか、考えられなかった。

真実を知る恐怖に、心はズシリと重さを感じる。逃げたくなる自分を叱咤しながら、ふんばるようにしてそこに立っていた。

掌には、汗が滲む。

やがて、舞踏ダンスの時間を知らせる流麗な舞曲が会場に響き渡る。

視界の端々では、それに加わろうと男女が手に手を取り合う。

母の言った噂は、ただの噂話でしかないと確認するために来た。

そんなルクレティアには、踊りダンスの時間が始まることなどどうでもよかった。ただ首をめぐらせ、アリストフォンを捜す。

そうしていると、ふと、会場がざわめいていることに気づき、動きを止める。話題的になりうる人物が現れたのだろうか、興味もなく思った。

にも拘らず、それまでルクレティアに視線を向けていた者たちが別の方向へと顔を向ければ、条件反射のようにそれに倣ってしまう。彼女も、何気なく舞踏場へと目をやった。

そして 後悔する。

それを目にした途端、呼吸をするのも忘れた。乱れ打つ鼓動、じわりと溢れ出る汗。心が凍りつくように、ルクレティアの身体までもが固まった。

「アリストフォン、様……」

ひくつく喉の奥から出た言葉は、掠れる。

視線の先には、正装をしたアリストフォンと、彼の腕に手をかける優美な女性。

頭の中が真っ白になり、世界から切り取られた場所に佇んでいる気分陥ったが、それも耳に届く噂話に意識を持っていかれる。

「アリストフォン殿が侯爵令嬢とご婚約するという話は本当だったのか」

「女性の関係が絶えなかつた方を射止めたのが、彼女だったのは納得ですわ。これで華々しいお噂はなくなるかしら」

「あら、わたくしは愛人でもよろしくてよ。あの美しい方に抱かれるならば」

くすくすと、笑みを含んだ艶冶な囁きが耳に痛い。

目にして、耳にして、初めて　ルクレティアは、母の言葉が真実である可能性を現実のものとして捉えるに至ったのだ。

(……どう、して)

なぜ、他の女と共にいるのか。

(どうして)

なぜ、他の女に優しい眼差しを向けるのか。

答えが見つからないまま、愛しい青年を見つめた。

アリストフォンは、令嬢を繊細な硝子細工のように慈しみ、接する。密着する男女の距離。二人の視線が絡めば、令嬢がくすくすと肩を揺すった。

令嬢は踊る最中、青年の耳元になにかを語りかけた。その声はルクレティアには届かない。

頬を染める彼女の仕草にアリストフォンが小さく頷くと、舞曲の終了と共に二人は舞踊の輪から外れていった。

取り残されたような、見捨てられたような、裏切られたような。心に芽生えたのは、痛嘆と憎悪、そして身を引き裂かれるほどの切なさ。

不意に、母の言葉が蘇る。

『あなたに会いに来ていたフライオス男爵家の……ああ、アリストフォンといったかしら？ 彼、侯爵家のご令嬢と婚約間近らしいわよ。近頃、夜会では有名な話』

(だから、私のもとへ来なくなったの？)

『魔女が愛してもらおうだなんて図々しい。お前は知らなかっただろうけれど、彼は多くの女性と関係を持っていたのよ。お前なんてよくて色物、普通に考えて珍獣くらいにしか見られていなかったということ。身の程を知りなさい』

(魔女と呼ばれる娘より、やっぱり……。ああ、だから、愛を意味する赤い薔薇を、一度もくれなかったの？)

疑問ばかりが浮かぶ。涙を堪えようとすれば、戦慄のように唇が震えた。

独り自問自答を繰り返す彼女の存在を知らないアリストフォンと令嬢は、庭園へとおりていく。

佇むルクレティアは、視界から二人が消えたことに慌て、急いで庭園へと後追った。

夜の帳がすっかり下りたそこは、夜会の中盤ということもあって密会中の男女が見受けられる。彩な花咲く庭園での逢引は、さぞや夢物語に浸るように情緒的なことだろう。

こそばゆいほど甘やかな耳を掠める耳語の中、身体を反転させながらルクレティアは二人を捜す。

夜会にあまり参加しないルクレティアといえど、庭園が艶事のあることなど知っている。ゆえに、女が単身でいれば危険であることも、理解していた。理解していたが、心と身体は一致せず、ア

リストフォンのことが心を占めていたから、なにも考えぬままに庭園におりた。

(まだ、近くにいるはず)

どこかから喘ぎ声が聞こえる。咄嗟に恥ずかしさが募り、ビクリと身体を縮こまらせた。こんな時、場違いだと実感する。

もしかしたら、誰かの情事を目撃するかもしれない思いながら。どうしてこんなことになったのだろうと考えながら、それでも必死に視線を彷徨させた。

そうして、少し奥まったところまで来た時。

背後から声をかけられた。

「君、ルクレティア嬢？」

振り返れば、赤茶色をした短髪の青年がすぐ後ろにいた。見ず知らずの男だった。

ルクレティアは肩を震わせ、一歩後ずさる。

そんなルクレティアの様子を気にした風もなく、青年は彼女の黒髪に手を伸ばす。

青年の意図が読めず眉間に皺を寄せて行動を見守っていると、その手は髪を撫でた。

「……っ！ なにを」

「う、わ。本当に黒いんだ。染めてるんじゃないわ」

青年は物珍しそうに目を丸くし、黒髪から耳を辿り、うなじへと指を滑らす。同時に、ルクレティアの背筋に、冷たいものが走る。

身の毛もよだつ恐怖に助けを呼ぼうとしたが、喉が引き攣り声を紡ぐことができなかった。

震えながらも意思表示しようとして顔を背ける、と。

少し離れた茂みの傍に アリストフォンがいた。侯爵令嬢を伴って。

「アリストフォン様……っ」

ようやく出た声は安堵に震え、視界は歪む。彼は、驚くように目

を睨り、すぐに柳眉を顰めた。

確かに、彼の、紫の瞳と目があつた。あつたのに。アリストフォンはルクレティアを一瞥し、侯爵令嬢の腰に手をやって踵を返す。

「……え？」

どうして、助けたくないのだろう、と。内心首を捻る。

瞬く目から涙が零れ、頬を伝う。

「どう……して……？」

その掠れた声に答えたのは、ルクレティアの髪を弄ぶ青年だった。

「もしかして、知らなかつた？」

ルクレティアは眉を寄せ、青年を見上げる。視線に応じるように、彼は言葉を続けた。

「君との関係は、彼にとつてただの遊びさ。だって君、伯爵令嬢だろ？ 彼は地位と権力を強く求めているから、結婚するなら高位貴族の女性だよ。……今まで彼は、愛人でもいいって言う女性ばかり相手にしてきたから、君もそつだと思つていただけ」

瞬間、ルクレティアが思ひ出したのは、会場で耳にした色めいた女の声。

『あら、わたくしは愛人でもよろしくてよ。あの美しい方に抱かれるならば』

（あの言葉は。それを意味していたの？）

ぼやけていた輪郭が鮮明になるように、それまで母に言われただけで確信するには欠けていたなにかが、あるべき場所に嵌つていく。

「案外彼も遊び下手なんだな」

青年は肩を竦め、ついでルクレティアを見下ろした。

「彼を、忘れさせてあげようか？」

その声は確かにルクレティアの耳に届いていたのに、意味を咀嚼することができなかつた。ただただアリストフォンが去つて行った方を見つめ、涙を流す。

それも辛くなり、俯けば。

首肯したと思ったのか、青年はルクレティアの手首を掴んだ。そうして、彼女は庭園の茂みへと引きずられるようにして夜の暗がりへと消えていった。

人目から身を隠すように植えられた植物の壁は、夜ゆえに闇色に染まっている。その枝木に咲く淡い色をした花は確かに浮かんでいたのに、今のルクレティアには気づくこともできなかった。

(すべて、すべて偽りだったんだ)

目尻から、また一筋涙が流れる。

けれど茫然と意識を遠くへ向けるルクレティアを気にすることなく、青年は彼女の首筋に顔を埋めた。

(私、は……)

首筋を這う感覚。

知っていたが、ルクレティアの求める青年が与える感覚ではない。胸元へと辿る熱は、否応なくアリストフォンと愛し合った夜を思い出させた。ともすれば、拒絶が口から出る。

「嫌あああつ！」

青年は驚いたように顔を上げ、舌打ちする。

拒んだ彼女が身を擦ることで、二人は地面に倒れこんだ。

地に芝は敷かれていたが、ドレスは土に汚れる。庭園に咲き乱れる花の香りも、今のルクレティアの心を落ち着かせることはなかった。

「やだ、やめて、はなしてっ」

泣きながら青年の身体を押し。しかし、青年が彼女を解放することはない。

青年は、「黙れ！」と声を荒げ、絞めない程度に片手で彼女の首を圧迫した。

それに怯えて動きをとめたルクレティアに、青年はにやりと、笑みを向ける。彼の瞳は蛇のように、獲物を狙う目をしていた。

ルクレティアは震える。怖いと、思った。怖くて怖くて仕方がなかったけれど、アリストフォンが助けしてくれることはない、知ってしまったから。どうしていいのかわからない。

「やだあ……」

しゃくりあげながら、ただ身を強張らせ、手で青年の服を掴む。引き剥がそうとしているのに、彼女の力など微々たるものだった。

男の大きな手が、身体のいたる場所を弄る。耳元の吐息は、徐々に荒くなっていく。

「魔女は、王を誑しこんだんだっけ。だったら、君もさぞやいいんだろうな」

青年の言葉。

それまで泣くばかりだったルクレティアは、突如抗うことをやめた。頭のどこかが麻痺する感覚は、心の働きも停止させたように感じる。

そうして、犯されるしなくなった彼女は、なぜか、嗤いたくなった。

（ああ、そっか。だからアリストフォン様は私を抱いたんだ）と、どこか納得する。

王を操るほどに魅了した、魔女。ルクレティアもそうなのだと、思ったのかもしれない。

（そっか……。そうなんだ……）

アリストフォンは、魔法も魔女も信じていないと言ったけれど。

（口先でなら、なんとでも言える）

嘘など簡単なのだ。ただ言葉を連ねるだけなのだから。

そう思い至れば、心は次第に冷めていき、他方頭では青年を抗うことを考えはじめた。

青年は、ルクレティアの身体に夢中で、動きに気を向ける様子などない。

今だ、と彼女は思った。

おもむろに、黒髪を束ねていた青い薔薇の簪へと手を伸ばし。

そうして、引き抜いた。

刹那。

庭園に、男の悲鳴が響き渡る。

手首から血を流し、蹲る青年。

はだけたドレスを直すこともなく、起き上がる娘。

その手には、血にまみれた簪を持って。

さらさらと、解かれた黒髪が風に揺れた。

血のおいも共に、風にのる。

「痛い……痛い……誰か、誰か　っ」

悲痛な声も、ルクレティアにはただの騒音。

緩慢に青年へと視線を向ければ、青年は大量の涙を流し、ルクレ

ティアを睨みつけていた。

「この……魔女があ！」

その叫びにも、ルクレティアは目を細めただけだった。

駆けるような足音が近づいてくる。青年の悲鳴で誰かが異変に気づいたのだろう。

だが、ルクレティアは逃げるつもりも隠れるつもりもなかった。

手に握る加害者の証も、捨てることなく。

べたべたと滑る、血にまみれた手を拭うこともなく。

ルクレティアと青年の傍で、足音は止まる。

「ルクレティア!？」

現れた男はなぜか血を流す青年のもとではなく、彼女のもとへ駆け寄った。跪いた気配の主は、直後ルクレティアの両肩を掴む。

「これは……なぜ、ドレスが乱れている……?」

その声は、アリストフオンのもの。今、ルクレティアの肩を掴んでいるのも彼のようだ。

確信できないのは、ルクレティアがその姿を見ようとはしなかつ

たから。

紅に染まった青い薔薇の簪を握る手に、アリストフォンのものが重ねられる。

その時、今度は女の悲鳴が耳をつんざいた。

横目で視線をやれば、アリストフォンの後を追ってきた、侯爵令嬢のものだと知る。

相次いで現れる人びと。そのうちの幾人かが、赤茶髪の青年の手当てを始めた。

「ルクレティア、なにがあっただ？」

アリストフォンの問いに、ルクレティアは嗤った。

（あの男と、庭園にいたことを知っていて、それを問う？）

「ルクレティア」

まるで心から心配するような声色。でも、ルクレティアの凍り始めた心を溶かすことはない。

（目が、合ったじゃない）と。ルクレティアは心の中で独り言。

「ルクレティア」

「……もう、どうでも、いい」

ルクレティアは、呟いた。

6・前世の夢 (3) (前書き)

軽い暴力描写があります。苦手な方はご注意ください。

6・前世の夢 (3)

世界が嫌いだった。狭い、狭い自分の世界。

きつと広い世界を知っていたなら、ルクレティアはまた違う生き方をしていたのかもしれない。

自分のことは、大嫌いだった。

誰にも愛してもらえないのなら、自分だけでも愛そうと思っていたけれど。誰にも愛されることのない卑屈な自分を、本当は誰よりも嫌悪していた。

青年を傷つけた日から、どれくらい経っただろうか。

寝台の中、ルクレティアは朦朧とする頭で考える。

夜会の日、乱れたドレスと汚れから、ルクレティアがその場で罪に問われることはなかった。青年が命に関わる傷ではなかったことが表向きな理由となっているが、実際は彼の身分が伯爵家よりも低いことが罰せられなかった理由だろう。

それでも、醜聞になったことは間違いない。

帰ったルクレティアを待ち受けていたのは、両親からの折檻だった。あれだけ無関心だった父も、今回は母の仕打ちに加わった。

問答無用で鞭で打たれ、痛みを耐えて蹲っていたはずだ。

しかし、気がつけば寝台の上にいた。いつの間にか、気を失っていたらしい。

目の奥と頭がとにかく痛む。鞭で打たれた傷痕は、熱を孕んで痛いというよりも熱く感じた。熱した鉄棒をあてられているような感覚が、身体のいたるところです。顔からその熱を感じないのは、

唯一の救いかもしれない。ルクレティアといえど、顔に傷は残したくはないのだ。

暴力を受けた傷から菌が入ったのか、ルクレティアは高熱に幾日も浮かされ続けていた。今も、その熱が上がることはあっても下がることがはない。だから、青年を怪我させてしまったことも、曖昧にしか考えられずにいる。

だがそのおかげか、両親はルクレティアに関わってくることはなかった。

体調不良で訪れた平穏というのが皮肉だが、今のルクレティアにはなによりもありがたい時間となっている。

そんな日々を過ごしていたある日、手紙が届く。

侍女に渡されたそれは、覚えのある花の香りがした。おぼろげな記憶を呼び起こそうとするものの、なぜか頭の片隅で警鐘が鳴り響き、やめる。

封を切ることも億劫で、手紙を渡して立ち去ろうとした侍女を引き止めた。

「……ごめ、なさい。目を開けているのが、辛くて。……読んで、ほしいの」

発熱は視覚に障害を与え、潤んだ視野で文字を読むのは難しい。動くことも辛くはあるが、聴覚だけ自由なのは救いか。少しの耳鳴りがするだけで、聞き取るだけならば問題はない。

侍女は静かに寝台の傍に置かれた椅子に腰掛けた。「失礼します」と断る声の後で、びりびりと封筒が破られる音、ついで、かざりと封筒から便箋を取り出す音が鼓膜に響く。

「読みますね。青い薔薇の姫君へ。あなたが罪に問われることはありません。彼が、自分が犯そうとしたのだと証言しました。そして、謝罪も口にしています。こんなことで心が慰められることはないと思います。しかし、あなたを想うと、なにかせすにはいられ

なかった。勝手なことをして申し訳ありません。会いに行くことを、どうか許してください。あなたを愛しています。アリストフォン」「読み終えた侍女は、「愛されていますね」と慰撫するように言う。ところが、ルクレティアはどこか歪んだ笑みを浮かべた。

(……どうでも、いい)

そう、心で思いながら。

罪の有無も、傷を負った青年がどう証言しようかと、アリストフォンがどう想っていてしようと。もう、どうでもよかった。投げやりになっていたのは確かだ。

けれど、それだけではない。

長引く高熱。下がる気配は一向にない。

日に日に体力を消耗していくのがわかる。五感すら少しずつ鈍っていくのだ。気づかぬほうがおかしい。それらと共に、心もひどく弱っていった。

自分の身体ことは、自分が一番よくわかる。

ルクレティアは目を瞑る。

(未来のことなんて、どうでもいい)

夢ですら、明るい未来を思い描けなくなっていた。それどころか、近頃では……。

(もう、どうでも、いいの……)

自分には、未来がないかもしれないのだから。

その数日後のこと。

ルクレティアの部屋の扉が叩かれる。

「お嬢様、アリストフォン様がいらっしゃいました」

侍女の声に目を覚ましたルクレティアは、ぼんやりと思う。

(本当に来たんだ)

愛おしいけれど、同時に憎悪も抱いた。これが愛憎なのだと、はじめて知った感情に小さく笑う。今まで知ることのなかった気持ち。

心はどんどん育っていくのに、黒く穢れていく気もする。

甘い疼きだけを感じることができたなら、どんなに幸せなことか。思いながら、溜息を零した。

「お嬢様？ お通ししてよろしいでしょうか？」

困惑する侍女の声。ルクレティアは掠れた声を張り上げ、今、自分にとって精一杯の音量で返す。

「だめ」

たった一言で、体力を大幅に使果たした気がした。

(これだけで息切れするなんて……)

こめかみに玉をつくる汗を指で払う。肩で呼吸を繰り返し、身体
の力を抜いた。ぐったりと寝そべり、再度目を閉じていると 扉
の向こうから声がした。

「ルクレティア、入ってはいけないのなら、どうかここで語りかけることを許してほしい」

耳に心地よい声だった。心にすんと、落ちてくるそれは、とても好ましく甘美だ。それでも、子守唄がわりにするのはいいけれど、意味を頭で考えるのは面倒くさい。返答するのも辛い。

返事をするのもなく、ルクレティアは瞑目を決め込んだ。

「 婚約は、取りやめたんだ。君のことが、頭から離れない。君のことが、好きなんだ」

どこか熱のこもった、甘い声。それも、今の彼女にはただの子守唄。

現実と眠りの狭間をたゆたいながら、ぼんやりと耳を傾け続ける。「……僕は、男爵家の次男だから、家を出ていかねばならない。だから、君と出会うまでは、地位を持つ女性と結婚しようと思っていた。貴族にいるには、それしか方法がなかった。ルクレティアと出逢ったからは、そんなことどうでもいいとすら思った。……でも、気づいたんだ。君と会うには、貴族でなければきつと門前払いだと君は貴族だ。いつか、家のために他の男と結婚するかもしれないと……貴族ではない僕を求めてくれないと、思って、いたんだ。でも

……。確かに初め、君に声をかけたのは物珍しさからもあった。だが、話したことに一切嘘はない。君のどこを好きだと問われたら、どこかなんてわからない。君の存在そのものに恋に落ちていたんだ。君を愛したから、いつもなら一夜だけの関係も、ずっと続けた」（どうでもいい）と思うのに、ルクレティアの目尻から涙が伝う。自分の震える心が憎たらしい。

アリストフオンの声が止み、少しの間があいた。一体彼はなにを口ごもっているのか。

彼がようやく紡ぎだした言葉は、緊張しているのかぎこちなかった。

「ルクレティア、貴族ではなくなったとしても、共にいてくれないか？」

真剣味を帯びた告白に、ルクレティアは青い瞳を覗かせる。これでも、驚いているのだ。

元気だったなら、ルクレティアは迷わず「はい」と答えたかもしれない。きつと涙に声を震わせながら、扉へと駆け寄って。

しかし、今の彼女にそんな体力など残されていない。

今さら。

それが、今のルクレティアの答え。

わずかに開かれた目は伏せられて、睫毛が青い瞳に影をつくる。

「君の顔を見て、もっと……もっと、伝えたいことがあるんだ。だから 会ってほしい」

その言葉は、まるで懇願のような声音をしていた。

そして、彼はその日から毎日ルクレティアのもとへ通うようになる。

けれど、一度として彼女が面会を許すことはなかった。

日を追うことにますます憔悴していく体力と気力。食事どころか水分の摂取もままならないのだから、当然のことだろう。

扉の外から届く言葉も、ついにははつきり聞き取れなくなっていた。

そのことを知らないアリストフオンは、返事がないにも拘らず、扉の向こうで愛を囁き続ける。

ルクレティアが最期の時も、彼は扉ごしに言葉を捧げていた。

うつらうつらと彼の子守唄に耳を傾けながら 最期に想ったの

は、なんだったのか。呟いたのは、なんだったのか。

意識が混濁していて、自分でもはつきりわからない。

ぼんやりと、まどろむように。

ルクレティアの命は尽きた。

7・そうして、今に至る

朝日の光が満ちる部屋で、むくりとハンナは身を起こす。

目覚めの気分はいつも通り……つまり、よくもなければ悪くもない。朝は気持ちよく目覚めたいところだが、前世が始終幸せだったわけではないから仕方のないことだろう。それも今では慣れてしまつたため、とくにどうとも思わなくなつたが。

晴天だからか、窓から射し込む光は白光のごとく明るい。

ハンナは「んー」と伸びをし、寝台から抜け出た。そうして窓辺に立つと、爽やかな空気を取り入れようと窓を開ける。

部屋に入ってきた空気は、少し冷たいものの心地いい。その風が頬を撫で、くせのない黒髪を揺らす。ハンナは微風そよかぜのこそばゆさに口元を緩め、ついで清しい空気で自分を満たそうと深呼吸した。

顔を洗って、着替えて、という粗方の朝の準備を終え、家族の集まる一室へ向かう。

夢の中で登場したような華やかなドレスを着る機会は、今世ではない。今来ている服も、質素ながら胸元をリボンが飾るもの。しかし、ハンナは前世と今世の落差を気にしていなかった。

「おはよう」

食卓に顔を出せば、朝食の準備をする少しふくよかな母と卓で食事の時間をいまかいまかと待つ熊のような父が、満面の笑みで「おはよう」と返す。ハンナにとって、当たり前前の日常。だが、前世の記憶を持つ彼女には、なによりも大切な日常でもあった。

食卓の自分に宛がわれた席につくと、母が硬くなったパン、それに昨夜の夕飯の残りだろうスープを並べる。温めなおされたスープ

は、香りのする湯気を立ち上らせ、ハンナの空腹を刺激した。

母が椅子に座ると、やっと食事の始まりだ。

みんなでとる食事。決して贅沢なものではないけれど、不満などにもない。和気藹々わきあたたかいと他愛もない話をして、冗談を言い交わす。それがなによりの調味料。

何気なくハンナは食事中、常に両親の様子を観察する。せわしなく、がつつくように食事する父。髭にはパン屑がついている。が、ハンナはそれを教えない。それは母の役目なのだ。一方、隣に座る母は下品にならない程度に、しかしながら豪快に食事をとる。母いわく、ハンナの食事のとり方は小動物のようらしい。いつも、「なに小動物みたいにちまちま食べてるんだい。そんなんじゃ、大きくなるもんもならないよ！ ほら、もっと食べな。父さんを見てごらん」と言つて父を親指でくいつと指しながら叱るのだ。

ちなみに、母の言う”大きくなるもん”が身長のことなのか胸のことなのか、はたまた身体全体の体型をさしてのことなのかは、大変気になるところだが、どうも食事の作法まで今世にあわせられないハンナは口を噤む。お小言を回避するためには仕方ないのである。生まれ変わることで常識等は今世のものを身につけられた一方で、作法といった前世でことごとく教育を受け、今世では頓着する環境にない物事はどうも合わせるのが難しい。これは、前世の記憶を持つていて困る事である。

父が最後のパンの欠片を口に放り込んだのを見て、ハンナは「そうだ」と声をあげた。

自分に注目した両親に、につこりと唇に弧を描く。

「今日、王子様のご挨拶を見に行こうと思うの。だから、ついでに城下で薔薇を売ってくるわ」

目を瞬いてきよとん、とした両親は、数拍後 母はにやりと笑い、父は顔を顰めた。

「おやおや。いつもフィロン殿下のご挨拶の日は非番だったのに…なんだい、恋に目覚めたかい。いい男だからねえ、フィロン殿下。

遅すぎる春がようやく来たねえ」

「男は顔じゃないぞ、ハンナ。父さんが認めるにたる男じゃなければ、彼氏には認めません！ いいか、父さんがこれから言うことをよく心に留めておくんだぞ。男は心だ！ 愛だ！ 情熱だ！ はい！」

”はい！”と言った父は、ハンナになにかを求めるように凝視してきた。ハンナが眉を寄せて首を傾げてみせると、「駄目だ駄目だ」と首を振られる。一体なにが駄目なのか。

すると、父は諭すように言った。

「復唱しろ、ということだ。このままでは悪い男に騙されかねん。さあ、もう一度やるぞ。男は心だ！ 愛だ！ 情熱だ！ はい！」

「……………もう行くね」

ハンナは呆れ顔でそそくさと席を立つ。

それをひきとめる父。母はあっはっは、と笑い飛ばした。飽くことのない、楽しい一家である。

朝調達された花々は、店先に並べられている。

ハンナはその中から、売れ筋の薔薇を手提げ籠に詰めていった。

「そうね、今日は」

言いながら、指を空で彷徨わせる。

迷った末選んだのは赤と、青。その二色の薔薇だけを手にとる。

赤い薔薇は、愛の色。

青い薔薇は、奇跡の色。ハンナにとって、思いいれのある、薔薇。今でもハンナは、アリストフオンを愛している。過去のことはいまだ苦さを帯びているものの、どうしても彼を見限れなかった。甘いのかもしれない、と思う。

父はハンナが悪い男に騙されはしないかと心配しているようだが、もう遅い。そんな自分に厭きれながらも、もう既に諦めているために自嘲するしかなかった。

食事を終えた両親が店先にやってくる。

父はまだ物言いたげだが、母が視線で制する。それに、つい噴出しそうになった。

店は、開店の時間だ。

「ほら、行っておいで」

送り出す母の言葉に、ハンナは「行ってきます」と笑顔で駆けだした。

アリストフォンの今世 王子フィロンがバルコニーで挨拶をする日は、毎度ハンナは非番にし、城下へ足を向けることなく部屋にこもっていた。

前世の記憶がはつきり蘇るまでは城下で売り子をしていた。その後、アリストフォンが侯爵令嬢と婚約間近だと知った記憶を夢にみながら、一度たりて彼を見に行った事はなかった。

今でも、彼を愛している。

湧き出る泉の水のごとく、いつだって溢れる恋情。痛くて切ない。けれど恋しくてたまらない。

心の底から、愛している。

だからこそ。

ハンナが城下につくと、そこは人で賑わっていた。老人から子どもまでいるが、妙齢の女性がとくに多い。

バルコニーから近い場所は、隙間もほとんどないほどに人で密集していた。

その場に辿りつくには些か……いや、かなりの勇気を要しそうだ。ハンナは若干躊躇しながら、唾を呑み込んで「よし！」と勇気を奮い起こし、人ごみへと突っ込んだ。

必死に身を擦って隙間をぬうことで、なんとかハンナはバルコニーの近くまで進むことができた。

丁度よい場所を見つけ、そこで見物することを決める。そうして、

バルコニーを見上げた。

「本当に、また、お会いするとは思わなかった」

小さな声音は、喧騒にかき消される。

視界の至るところには、黒髪の女性がいた。これぞ、王子の書いた物語の効果。

彼女はくすりと笑声を漏らす。

（まさか、私の後を追うなんて思わなかった。しかも、呪い^{まじな}までして）

アリストフォンは、魔法も魔女も信じていなかった。なのに呪いをしたのは、藁にでも縋る思いだったのだろうか。

ハンナは黒髪を一房指に絡ませ、伏せた目でそれを見つめる。

「また、この黒髪と青い瞳と付き合わなくちゃならなくなっただわ」
驚くことに呪いは、前世の姿とまったく同じに生まれ変わらせた。どうせ生まれ変わるのなら、誰もが憧れる容姿で生まれ変わったものだ。そも、父も母も黒髪と青い瞳を持っていない。それでも、両親はハンナを二人の子どもだと信じて疑わないのは、祖先に黒髪と青い瞳を持つ者がいたからだ。

もし、と思う。もし、誰も黒髪と青い瞳を持つ者がいない一族の母から生まれていたら。また、彼女は邪魔者だっただろう。

（本当に、厄介ね）

苦笑を滲ませた。

そんな風にして薔薇を売ることもなく思考に耽りながら、フィロンがバルコニーに出てくるのを待っている。

隣にいた中年の男に声をかけられた。

「おー、ハンナちゃん。今日は非番じゃないのかい？」

軽快に片手を挙げて片目を瞑った彼は、花屋の常連客だ。

「たまには親孝行を……なんてね。本当はフィロン殿下を見に来たの」

ハンナの言葉に、男は涙腺を親指と人差し指でつまんで泣くふりを始める。

「うっ、ハンナちゃんもなのか。うちの息子が不憫でたまらん。女の子たちにふられてはっかなんだよ。ハンナちゃんは男を顔で選ばないと思って、嫁に来てもらおうと思ってたんだがな……」
「おじさん、口がうまいんだから。仕方ない、今日は一輪おまけするわ」

だから買わない？

小首を傾げて言えば、「口が上手なのはハンナちゃんだよ」と男は眉尻を下げて口元を和ませる。

「ハンナちゃんのおすすめを十本もらおうかな。銅貨十枚だったね」「まいど！ おすすめは……やっぱりこれかしら」

ハンナは迷いなく青い薔薇を差し出す。

銅貨と薔薇を交換すると、男は薔薇の芳香を楽しみながら尋ねた。「青い薔薇が好きなのかい？」

ハンナは男を仰ぎ見る。どこか、鋭さを秘めた眼差しに、彼は目を丸くした。

ついでハンナが浮かべたのは、心を読ませぬ笑みだった。

城下が歓声で湧く。

バルコニーに、フィロンが現れたのだ。

ハンナと男はそちらへと意識を向け、顔を上げる。

視線の先で手を振るのは、ハンナの過去の記憶と違わぬ美しい青年。
年。

白金の髪、紫の瞳、甘い微笑に多くの乙女が魅了される。

(本当に 厄介ね)

一目見ただけで早鐘を打つ己の鼓動に、溜息を漏らす。そして頭の片隅で、危険を知らせる警鐘が鳴り響くのを、どこか他人事のように耳を澄ませて聞いていた。

今でも、確かにハンナは彼を愛している。

でも。

(見つかったら見つかったで、仕方ないけど)

こつちも、思うのだ。

(他の誰かと、穏やかな愛を育むのも、いいと思うの)

それが恋愛になるかはわからない。アリストフォンに抱く感情と同質のものを、他の誰かに抱けるとは、今のハンナには思えない。しかし、親愛ならば可能だと思っただ。

別に、身を滅ぼすほど愛するひとと、結ばれる必要はない。

今のハンナは、狂うほどに情熱秘めた愛よりも、穏やかな幸せを維持することを望み、求めている。

だから アリストフォンともう一度出逢わなくても、構わなかった。

騎士の詰め所で薔薇を選ぶことになった時。”ルクレティア”ならば青い薔薇を選ぶだろうと考えたから、関係を断ち切るように赤を手にとった。今の自分は、ルクレティアではない。ハンナなのだから。

今日、会いに来てしまったのは、矛盾だけれど。わかっている、好きだからその姿を見たくなくなった。ただそれだけ。愛が通じずとも、想うだけで十分。見返りなんて必要ない。

「愛しています、アリストフォン様」

小さな小さなその声は、隣にいる男の耳にも届かぬほどに。

けれど。

ハンナの囁きに、遠い場所にいるフィロンは弾かれるかのごとく城下を見下ろした。

ハンナとフィロンの目が合う。視線が、絡んだ。

直後、フィロンの目は驚愕に見開かれる。形のよい唇は、「ルクレティア」と確かに呟いた。

口の動きを捉えたハンナは、何気なく視線を逸らして踵を返す。

「え、ハンナちゃん!？」

それまで王子が現れるのを待っていたはずなのに、姿を見せた途端バルコニーから遠のこうとするハンナ。隣にいる男は不思議そう

な顔で声をあげた。

しかしハンナは足をとめることなく、そのまま人ごみの隙間を掻い潜る。

黒い髪を靡かせて。彼女はそこから走り去った。

あとがき

最後までご覧くださり、ありがとうございます。

完結いたしました。皆様の考える最終話になっていた自信はあまりなかったりします。申し訳ありません。

書きはじめたきっかけは、悲恋書きたい でもハッピーエンド推奨派 なら両方、という感じでございます。ゆえに、悲恋であり、ハッピーエンドだと書き手的には思っております。

率直に申し上げれば、最終話のその後はハッピーエンドです。時代を超えた粘着男がバッドエンドにするはずがありません。しかしながら、二人が結ばれるまでは攻防戦が続きます。穏やかな幸せを求めるハンナと、なにがなんでもハンナと結ばれようとするフロンなので……。二人の愛の強さは同等だったとしても、考え方に隔たりと温度差があります。それはやはり、わかれ方に起因しています。

ハンナについて。

ロマンス系を突っ走るかと思いきや、彼女は新たな人生で、恋愛以外の別の幸せを知りました。ともすると、スマートフォンへの愛はあれど、別に無理してくっつくこととは思っておりません。

彼女のモデルが、某大物女優さんであることがこの考え方の理由です。彼女が言った言葉は印象的でした。

「生まれ変わったら、もう出逢いたくありません」

それは、彼女の今までにこう思った理由があったのではないかと思います。

同じように、ハンナもです。

今のハンナの目標は、花屋をつぐため、婿をとること。
だからこそ、攻防戦になります。

決着がつく理由は、よくも悪くもフィロンがヤンデレだから。
彼女に幸せはくるのか　！？　という、波乱万丈、うんざりしながら愛の溢れる未来になるかと思えます。

フィロンについて。

前世で、最愛のひとを失ったことをきっかけに、ヤンデレ化しました。

アリストフオンのままならば、今世でハンナが屈することはないと思われませんが、相手はフィロンです。今世で結ばれないなら、来世にかけるのもあり？　と見えかねません。

今世に自分が存在する理由は、ルクレティアと結ばれるためだと思っているのです、彼がぶれることはないのでは、と。王族としての責務より、恋を優先しそうです。

そんな彼は、またまた後世に名を残します。街娘と恋に落ちた王子として。

彼に仕える者や兄王子たちはうんざりとびっくりの連続だと思えます。

目指せ某英国の元王子だと思っております。

青い薔薇について。

最初、西洋Ⅱ薔薇というイメージゆえに薔薇を使用しました。

私個人、花言葉や石言葉が好きなため、度々こういったんなら言葉を用いたネタを使うと思います。別作品でも、クローパーの花（？）言葉を使用しております（隠れて石言葉も）。

そんなこんなで、花Ⅱ花言葉という印象が強いものの、花言葉の存在は一つの文化なんだなあ、と思った結果、前世ではあった花言葉ですが、今世の国には存在していません。

実は、薔薇以外に、紫陽花等も検討しました。が……花言葉が…

：なんとも不誠実と申しますか、どう捻ってもくねっても、物語に使いづらくて。

そんなこんなで、結局薔薇になりました。

転生ネタについて。

転生もの、好きです。

最初、ネタ帳にある別の異世界トリップものネタ（長編）を短くして使おうと思っていました。なので、今掲載されているものとの相違点は以下です。

・ハンナとフィロンが生まれ変わった世界は、魔法あふれるファンタジー。

・アリストフォンの今世 王子フィロンは優れた魔術師。

・前世とは違う世界に生まれ変わってしまった二人。フィロンは、ハンナが前世いた世界に生まれ変わっていると信じ込み、黒髪の乙女を異世界召還しては帰り、を繰り返していた。その噂は、城下にまで。

前世とハンナについては変わりありません。世界観が主に変わったかな、と。

しかしながら、中短編で異世界ファンタジーを書くには無理がありました。なにが無理かといえば、気軽に書く、という点。世界観を適当につくろうとしたら、どこまでが魔術の許容範囲か、制約はどうするか、魔法は体力と同等か否か、魔法があるなら科学技術は必要か、等の設定に煮詰まり、魔法ありのファンタジーは却下になりました。力不足で不甲斐ない次第です……。

総合しまして。

余韻を残す終わり方をしたかったため、ラブコメ路線一直線になる、二人の目があつたその後を本編ページに更新することはありません。シリアス？ なにそれおいしいの？ になること間違いなしです。

やっちゃった感はあるけど、後悔はしておりません。

最後までお付き合いくださった心広い読者様に、心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7689w/>

青い薔薇のルクレティア

2011年10月19日03時16分発行